

走り読み文学探訪リバイバル(その29)

「アキラの明星」 作 高橋三千綱 画 本そういち

徳間文庫(447円(当時), 1992年初版)

紹介者: 榎本博康

双葉社アクションコミック(1~4巻各524円(当時), 1997~98年初版)

[照会]

北川アキラは無銭飲食の見事な逃げっぷりが縁で俊足が認められ、実業団チームに拾われる。五千メートルの記録会で好成績をおさめ、一万メートルの日本選手権で3位に入るが、陸連幹部の意向でオリンピック代表から外される。

実は彼は六大学野球で、1年生の時にピッチャーで大活躍したのだが、上級生の反感を買ってリンチに会い、行方知れずになっていた。フィンランドで2年間を過ごしていたのだ。

アトランタ・オリンピックのマラソン開催日と全く同じ日に、不幸にして選ばれなかった真の実力者を集めたマラソン大会、「沖縄国際マラソン」が企画され、アキラも招待される。そして初マラソンに挑む。当日は朝から28度の快晴であった。アトランタの12時間前のスタートである。より過酷な気象条件のもと、真の実力者を証明しようと。



[感想]

以前、マラソン漫画は流行(はや)らないと思われていたという。そこへ、既に紹介した井上正治の「マラソンマン」が少年マガジンに1993年から97年にかけて長期連載され、ヒットした。ただし、非常に暗い作品であった。しかし、この成功に刺激されたからだろうか、1994年末から坂田信弘作、中原裕画の「奈緒子」(なおこ)が書かれ、ビッグコミック・スピリッツ誌に好評連載中で、既にマラソンマンをしのぐ長期連載となっている。1996年に北崎拓の「なぎさMe公認」(注:Meはミと読む)が少年サンデーに登場し、これも長編に育ったが、1999年に完結しているようである。今回紹介する「アキラの明星」は1996年後半からアクションコミック誌に約1年連載されたものである。

まずこのマンガには腹が立った。マラソンを全く馬鹿にしている。だいたい野球のピッチャーがマラソン選手に転向できるわけがない。スポーツ選手で走れるのはサッカーとボクシング、走れないのが相撲と野球だ。これはちょっと言い過ぎかもしれないが、元々の体形の違うスポーツだ。その素人がいきなり長距離トラックの標準記録Aを突破できるはずもない。マラソンで最初からぶっ飛ばして、後半まで持つはずがない。これではマラソンがいかにもイージーではないか。

しかし、思い直そう。荒唐無稽だからと言って怒ってはいけない。これはきっと意図があるのだ。それを考えてみよう。

アキラの夢は大リーグで投げることだ。大学野球部でのいじめ、というかリンチに会い、一旦はその夢を捨てたものの、心の奥底ではくすぶり続けていた。ランニングは、彼のくすぶっていた夢を、再び燃え上がらせるきっかけであった。物語の始め、彼はどこかいいかげんな人

間として登場する。しかしレースを重ねる中で、彼は勝つ執念を持ち、次第に走り方を学んでいく。そしてマラソンで優勝したあと、単身アメリカに渡る。野球のプロテストを受けるためだ。

挫折から立ち直り、再び夢を目指す。ストーリーの骨格は単純だが、作者はそのきっかけになぜマラソンを使ったのだろうか。大リーグに挑戦するための、個人的な強さをマラソン競技に求めたのだろうか。マラソンが個人競技でありながら、周囲の人々との協力で育って行くという側面が、この話にふさわしいのだろうか。

所で本作品のサブテーマはオリンピック批判だ。ここでは、オリンピックを相対的な競技会として扱っている。つまり、いくら権威を装っても、それは選考と言う過程をとる以上、実力とは別の要因が入る。所詮は色々な利権やしがらみからみついた、ひとつのスポーツショーに過ぎない。本書の「沖縄国際マラソン」はオリンピックへの対抗レースとして企画された、裏オリンピックという性格のレースだが、現在では既に一流選手にとってオリンピックは選択肢の一つにすぎなくなりつつあると言われている。ベルリン、ロッテルダム、ロンドン、ボストン……沢山ある。賞金がいい、世界記録を狙える、名誉もある。

一方野球は、特にアメリカでは大リーグとその下位リーグから階層的に構成され、一流のプレイをするには、どうしてもメジャー入りをしなければならない。つまりオリンピックとは比較にならない程、組織に権威がある。観客動員との兼ね合いで、商業的な価値から真の実力者を集めて、高度なプレイをしなければチームのみならず、リーグも存続が危うくなる。マラソンには多くのレースがあるが、野球は大リーグしかない。実力と一致しているから権威がある。だからアキラはマラソンを一つのステップとして、メジャーリーグに向かったのだろうか。現実にはありえないが、もしもマラソンと野球の二つの選択肢があれば、どちらを選ぶかという問題への答えとして。

それにしてもラストは沖縄のマラソンである。NAHAマラソンに参加したことのある方にはおなじみの、奥武山競技場をスタートし、ゴールする折り返しコースだ。絵は現地に良く取材しており、懐かしく思えます。あの暑さがたまらない魅力だったが、NAHAマラソンは12月である。ここでは全く冗談としか言いようのない真夏の沖縄だ。そこを、丁寧に描いている。

しかしこのレースには嫌悪感を抱くだけの暴力的なランナーが出演していて、倒れた選手をわざと踏んづけたりする。やはりマラソンを馬鹿にしているとしか思えない。

(初稿2000. 4. 10)

#### [リバイバル感想]

まあ、表紙絵の走り方からして長距離走では無いし、スタッフ一同がマラソンを分かっているのだろう。例えば柔道のあの作品とか、動きを良く表現しているのとは差が大きい。でもこのような「発見」をすることも「走り読み文学探訪」の目的であるから、良いサンプルとも言える。

本作品はこのくらいにして、HAHAマラソンだ。那覇市の友人がセッティングしてくれ、仲間内で豪華な前夜祭を開いていただいた。米国からも2人の友人が参加した。テレビ取材もあったと思う。この席に沖縄泡盛古酒(コース)の甕があった。余りの旨さに我を忘れた。明日はマラソンという考えを捨てた。明日はあす、今夜はこんや。いつも不思議に思うのだが、沖縄料理や古酒は沖縄の地でこそ抜群に旨い。どうしても近所の沖縄料理店と違うと思ってしまう。そして何杯も味わった。特に含みの良さが抜群、盃を重ねてもその印象が損なわれない。

ということで、翌朝はさんざんであった。ただ二日酔いをリアルに表現しても仕方が無いの

で割愛する。幸いにも宿舎がスタート地点に隣接している。そこでスタート時刻まで部屋で粘ることにした。しかし回復しない。このマラソンは最後尾が出発できるまで30分くらいかかる。そこでさらにスタートの号砲20分過ぎまで部屋で粘った。そして二日酔いと共存の走りが始まった。大きな関門は中間点でもある摩文仁の丘である。その碑に刻まれた人々のお名前を確認する余裕もなく、制限の10分前を切って通過した。すれすれだ。それから粘りの走りであったが、快晴で気温は29℃という街頭表示があった。暑い。

何とか6時間近くかかって、やっとゴール。実は新聞記者と米国ランナーの取材に立ち会うことにしていたのだが、予定のT氏ははるか以前にゴールしていて見当たらない。そこで同じ頃にゴールしたS嬢へのインタビューに切り替えた。T氏には悪いことをしてしまった。

(2021. 3. 26)